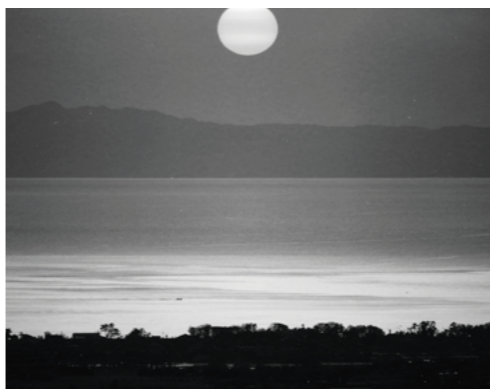


恵まれた大自然を生かした 黒部のエコロジー政策

はじめに
「全国市長会が力を合わせて震災支援・復興を」

このたびの東北地方太平洋沖地震で被災された皆さま方には、心からお見舞い申し上げます。また、今回の震災でお亡くなりになられた方々には謹んで哀悼の意を表します。黒部市でも震災発生直後よ



「日本の夕陽百選」に選定された黒部海岸の夕暮れ

り、市民病院医療スタッフ、消防職員、保健師などを被災地に派遣し、被災された皆さまの救援活動を実施しており、去る4月18日には、特に被害が甚大な南三陸町を訪れ、佐藤仁町長に本市の支援体制や被災者受入などについてご説明いたしました。市内では民間の協力で住宅など計約100戸が入居可能であり、雇用も確保されており、行政でも市営住宅の提供、被災地から小中学校への転校などに対応することにしております。

今回の震災は津波被害があまりに広範かつ甚大であるとともに、原発関連の危機事象がさらに拍車を掛けており、全国の自治体が力を合わせ、支援・復興に当たることとが極めて重要であります。本市といたしましても、被害に遭われた皆さまが一日も早く平常生活に

復帰し、元通りの平穏な日々が過ごせますよう、微力ながらも貢献していく所存であり、全国市長会の一員としてこの未曾有の危機をともに乗り越えていきたいと考えております。

大自然のシンフォニー文化・交流のまち 黒部

本市の中心部を流れる清流・黒部川は日本を代表する急流河川であり、上流部は急峻な北アルプスにはぐくまれ、中下流部には臨海扇状地である黒部平野が広がります。大正時代から電気鉄道の敷設工事が開始され、黒部奥山の電源開発に始まり、宇奈月温泉が開湯するなど、水力発電と観光開発によりまちが発展した歴史を有します。現在の黒部市は、平成18年3月に「旧・黒部市」と「宇奈月町」と

が合併し、誕生しました。将来都市像「大自然のシンフォニー文化・交流のまち 黒部」の実現に向け、来訪される皆さまに感動を与えるとともに、市民の皆さまが快適に暮らせるまちづくりを目指しております。

環境・エネルギー政策をめぐる問題

日本のエネルギー自給率は低く、将来の化石燃料の枯渇や今回の震災に伴う原子力エネルギー政策の見直しなど、将来を見据え、国際的なCO₂の排出抑制の動きを考慮しながら、安全安心でクリーンな新エネルギーの活用を進めていくことが求められております。本市では、自然と共生し持続可能な「人と環境にやさしいまちづくり」を推進するため、各種のエコロジー施策を黒部市総合振興計画の最重点事業として位置付けております。

自然エネルギーの利活用

① 下水道バイオマスエネルギー利活用事業…下水道汚泥などとドイツポーザー経由の家庭生ゴミや近隣の事業所からの食品残渣(コーヒーカー)を黒部浄化センターで消化・発酵させ、バイオガスを取り出し、熱エネルギー回収と発電を行うものであり、去る5月10日に完成式を行いました。この事業では民間事業者のノウハウと資金を活用するPFI方式を採用し、最新技術の導入やコスト削減などを図りました。

② 農業用水を活用した小水力発電…黒部川水系の宮野農業用水の落差(有効落差約50m)を利用する「宮野用水小水力発電所」の工事安全祈願祭を4月25日に行いました。

③ 各小学校への太陽光発電設備の設置…太陽光エネルギーはCO₂や有害物質を排出することがなく、クリーンで数十億年消費することのない無限のエネルギーです。平成22年度より市内4小学校において、出力20kw程度の発電設備の設置を開始しております。

最大出力780kw、年間電力量は530万kwhとなり、1260世帯分の消費電力に相当します。工事の完成は平成24年1月に予定され、初めての黒部市営の発電所が誕生します。

も約50kmに及びます。本市ではCO₂の排出抑制や省エネなど環境政策としてこの歴史ある鉄道を生かし、コンパクトシティ、高齢化の進展への対応、観光振興などの観点から鉄道を軸としたまちづくりを推進しております。さらに、平成26年度には北陸新幹線新黒部駅(仮称)が開業し、併設して「地鉄新駅」を設置します。また、JRから経営分離される北陸線についても利便性向上や新幹線駅とのネットワークの確立などに対応

していく必要があります。今年、新・黒部市となって6年目、本市の悲願である新幹線開業まであと4年を切りました。本市の100年の計を考えるとその礎を築く大変重要な時期であり、正念場であると思っております。将来都市像「大自然のシンフォニー文化・交流のまち 黒部」の実現のため、市民参画と協働の下、黒部市のまちづくりを進めていく所存であります。



黒部峡谷の絶景とトロッコ電車は人気の観光スポット

先駆的な電化型観光地を目指しています。市内には電源開発の経緯から鉄道網が発達し、駅数は21を数え、路線長

鉄道を軸としたまちづくり



黒部市長 堀内康男

〔特産品〕世界に誇るモノづくりの技術(YKKなど)、良質なコシヒカリ「黒部米」など



〔観光〕黒部峡谷鉄道や宇奈月温泉のほか名水百選「黒部川扇状地湧水群」など
〔イベント〕明日の稚児舞、新川牧場ファームフェア、カーター記念黒部名水ロードレース、石田浜マリリンフェスタ、宇奈月温泉雪のカーニバルなど

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

さらなる躍進を目指して 地域資源を生かしたまちづくり

はじめに

去る3月11日に発生した東日本大震災によりまして、甚大な被害を受けられた皆さまにお見舞いを申し上げますとともに、お亡くなりになられた皆さまには心より哀悼の意を表し、ご遺族の皆さまに心からお悔やみ申し上げます。被災地の1日も早い復興をお祈り申し上げます。

鴻巣市について

鴻巣市は、埼玉県のほぼ中央に位置しており、東京から50km圏内という地理的状況から宅地開発が進む一方、地域の西部を荒川、中央部を元荒川、東部を見沼代用水が流れ、郊外には田園地帯が広がるなど、水と緑に囲まれた自然豊かな地域となっております。

江戸時代には中山道の宿場町として栄え、長い歴史と伝統を誇る「ひな人形のまち」として、また近年では「花のまち」として全国的にPRしています。平成17年10月には、吹上町、川里町との合併により人口約12万人の新「鴻巣市」が誕生し、ひな人形や花、自然、文化といった地域の個性を生かしながら、新市の一体性の確立と均衡ある発展を目指しています。

花や人形を生かしたまちづくり

現在も本市を代表する名産品である「ひな人形」は、江戸時代中期から「鴻巣びな」として広く知られるようになり、鴻巣は関東三大雛市の一つに数えられていました。白い顔のひな人形に対し、獅子頭や

だるまなど、全体を赤く染めた「赤物」と呼ばれる練り人形を製作する「鴻巣の赤物製作技術」も、本年3月に玩具の製作技術としては初となる「国指定重要無形民俗文化財」に指定されるなど、長年にわたり受け継がれてきた人形製作の歴史と伝統技術を今に伝えていきます。また本市は、東日本最大級の花き卸売市場「鴻巣フラワーセンター」を有する全国有数の花の産地でもあります。

このような貴重な地域資源を最大限に活用し、活気あるまちづくりを推進するため、毎年2月中旬より、日本一の高さ(30段、6.7m)を誇るピラミッドひな壇を市役所ロビーに飾る「鴻巣びな祭り」を開催しているほか、5月には日本一の栽培面積(12.5ha)を誇る荒川河川敷のポピー畑や、市内



荒川の川幅日本一にちなんで開発された「川幅うどん」

の長さを川幅と定義していることから認定されたもので、その長さは約2537mもあります。現在は埼玉県や隣接する吉見町、そして地域の皆さんが一体となって、川幅日本一によるまちおこしに取り組んでいます。最近では、この川幅日本一にちなんで考案された幅の広い「川幅うどん」をはじめとする「川幅グルメ」が多くのメディアで取り上げられており、各地で開催されるB級グルメ大会でも好成績を収めるなど、今や埼玉県を代表するご当地グルメに成長しました。本市を訪れる機会がありましたら、ぜひご賞味いただきたいと思えます。

さらなる躍進を目指して
早いもので、本市は合併から6年が経過しようとしています。私は、合併後のまちづくりにおいて、まず、本市で暮らす皆さんの生活や企業活動の活性化が必要であると考え、市民の皆さんにとって長年の夢であった市内JR3駅(鴻巣駅・北鴻巣駅・吹上駅)の駅前整備事業をはじめとする都市基盤整備を重点的に推進するとともに、私の基本的政治姿勢である市民の皆さんとの協働によるまちづくりに取り組んでまいりました。

このほか、市民の皆さんにふると鴻巣への愛着をさらに深めていただくため、本市の名前の由来の一つでもある「このとり伝説」にちなみ、このとりをシンボルとしたまちづくりを展開しています。今やこのとりは、市民の皆さんにとりましても大変馴染み深いものとなっております。現在、このとりが本市の空を舞う日を夢見て、このとりが棲める豊かな自然環境を保全・整備するべく、市民の皆さんとともに研究を重ねています。また、「このとりが赤ちゃんを運んでくる」という言い伝えにちな



鴻巣駅東口駅前広場に設置した「このとりモニュメント」

全育成にも力を入れています。今後も、市民の皆さんに「鴻巣に住んで良かった」「ずっと鴻巣に住み続けたい」と言ってもらえるよう、このとり関連事業をはじめ、地域資源を活用した魅力あふれるまちづくりを推進しながら、市の将来都市像「花かおり 緑あふれ 人輝くまち このす」の実現に向け全力を傾注していきます。



日本一の高さを誇るピラミッドひな壇

このほか、市民の皆さんにふると鴻巣への愛着をさらに深めていただくため、本市の名前の由来の一つでもある「このとり伝説」にちなみ、このとりをシンボルとしたまちづくりを展開しています。今やこのとりは、市民の皆さんにとりましても大変馴染み深いものとなっております。現在、このとりが本市の空を舞う日を夢見て、このとりが棲める豊かな自然環境を保全・整備するべく、市民の皆さんとともに研究を重ねています。また、「このとりが赤ちゃんを運んでくる」という言い伝えにちな

プロフィール

- ◆ 面積 67.49km²
- ◆ 人口 12万841人
- ◆ 世帯数 4万6422世帯

〔将来都市像〕花かおり 緑あふれ 人輝くまち このす

〔まちの特徴〕江戸時代には中山道の宿場町として栄え、長い歴史と伝統を誇る「ひな人形のまち」、全国有数の花の産地である「花のまち」として、地域資源を生かしたまちづくりを展開

〔市町村合併〕平成17年10月1日 吹上町、川里町と合併



鴻巣市長 原口和久



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

市民参加で 安心・安全で 元気な稲沢を目指して

はじめに

稲沢市は、愛知県の北西部、濃尾平野の中央に位置し、かつて尾張国の政治・文化の中心地として国府が置かれていた歴史あるまちです。

地域の西側を流れる木曾川は肥沃な大地と温暖な気候をもたらし、古くからこの地域を日本有数の穀倉地帯として発展させました。この恵まれた気候風土は、この地を樹木の生育の格好の場所とし、日本四大生産地の一つに数えられる植木産業を育ててきました。

また、東の鶴見、西の吹田と並び日本三大操車場が立地し、長年まちのにぎわいを生み出してきました。昭和62年の国鉄民営化の影響を受け、広大な空き地となったその地で、現在、尾張西部都市拠点地区として、ショッピングモール

を中心とした新たなまちづくりを進めています。

昭和33年に人口約5万人で市制を施行した本市は、平成17年の1市2町の合併を経て、現在人口約13万8000人の尾張西部の中核都市として発展を遂げてまいりました。

向こう3軒両隣の精神で まちづくり

本年3月には未曾有の大震災が発生し、多くの尊い命が奪われました。改めて犠牲者の方々のご冥福をお祈りいたします。いまだ厳しい状況の中で日々を過ごされたいらっしゃいます被災者の皆さまには心からお見舞い申し上げます。一日も早い復興を願っております。

この大災害は、一部の市役所、町役場の機能を飲み込んでしまいました。

が辺り一帯を黄金色に染め、幻想的な景色を醸し出し、訪れる人を魅了します。

また本市には、全国的にも珍しい河川砂丘が木曾川左岸にあり、国・県・市のそれぞれの施設で、ウインドサーフィンや野球といったスポーツやバーベキューなどが楽しめます。毎年10月には、「稲沢サンドフェスタ」を開催し、砂の造形展やビーチバレーなども楽しんでいただいております。今後は、国・県・市の施設を一体的に整備し、レクリエーションの一大拠点としていきたいと考えています。

本市の観光資源といえば、まず1240年の歴史を持つ国府宮「はだか祭(儼追神事)」が挙げられます。毎年旧暦正月13日には、1万人ほどのフンドシ1枚の裸男が厄除けを祈願するために集まります。2つ目は、日本一の生産を誇るギンナンです。11月にはイチヨウ



1240年の歴史を誇る、国府宮「はだか祭」

また、鎌倉・室町時代の重要文化財も多く、仏像・仏閣などの国指定の重要文化財は23件あり、県内4番目の数を誇っております。尾張国分寺跡の国指定に向けた取り組み、豊富な文化財を生かした観光の振興も図っております。

さらなる発展を目指して

現在、平成29年度を目標年次に第5次総合計画の将来都市像「自然

私は、人と人とのつながりが希薄になってきた昨今、「災害が起これば市の職員も被災者になります。市民の皆さんのところへ駆けつけたくても駆けつけられません。まずは身近な方々で助け合ってもらいたい。そのためには『向こう3軒両隣』の精神で、日ごろから近所で声を掛け合っていたきたい」とお願いしてきました。日ごろから

声掛けをし、近所付き合いを通じて信頼関係を築くことが、地域の触れ合いと安全を築くことになると考えているからです。地域での声掛けの意識と自分たちのまちは自分たちでできいにする精神を本市全域で広げていく組織として、平成21年11月に環境ボランティア「さわやか隊」を立ち上げました。

ごみを拾う行動から捨てない行動へ。この活動が市全体に広がれば、血と汗の結晶である税をほかの行政サービスに回すこともできます。一人でも多くの方に、「ごみを捨てることは、お金を捨てること」という意識を持っていただければ、より一層住み良いまちになっていくと思っています。また同時に、この活動でコミュニケーションの醸成を図ることにより、犯罪の抑制にもつながると期待しています。



市民からの公募で誕生したマスコットキャラクター「いなっぴー」

現在、160団体、16000人で活動していただいておりますが、3000人を目標としています。

いなっぴーを先頭に観光振興

市の活性化を図るために、観光の振興は欠かせません。

本市は、マスコットキャラクター「いなっぴー」を先頭に観光の振興

の恵みと心の豊かさ 人が輝く文化創造都市」の実現を目指して、まちづくりを進めています。

昨今の自治体を取り巻く状況は先行き不透明で大変厳しい環境下にありますが、本市におきましては、地域医療を守るための新市民病院の新築移転、東西幹線道路の整備、小中学校などの耐震化をはじめ、さまざまな課題事業に取り

組まなければなりません。さらには財源の確保と雇用の創出を図るため、市南部に23haの工業団地の開発と企業誘致を進めています。今後とも、合併の理念である地域の均衡ある発展を進め、市民の皆さんが、住むことに誇りと愛着の持てる「安心・安全で元気な稲沢」の実現に向け、市政運営に全身全霊を傾注してまいります。

プロフィール

- ◆ 面積 79・3 km²
- ◆ 人口 13万8313人
- ◆ 世帯数 5万667世帯

〔将来都市像〕自然の恵みと心の豊かさ 人が輝く 文化創造都市

〔まちの特徴〕愛知県の北西部、濃尾平野の中央に位置する、木曾川の恵みを受けた東西14・6 km、南北9・2 kmの都市。地形は海拔0・5 mから7・5 mで平坦

〔市町村合併〕平成17年4月1日 中島郡祖父江町、平和町を編入合併



稲沢市長 大野紀明



〔特産品〕植木・苗木・花き、ギンナン
〔観光〕稲沢市狭須記念美術館、桜ネックス、国営木曾三川公園ワイルドネイチャープラザ、木曾川祖父江緑地公園、尾張大國霊神社(国府宮)、矢合観音、善光寺
〔イベント〕国府宮「はだか祭」、いなざわ植木まつり、いなざわ梅まつり、稲沢あじさいまつり、そぶえイチヨウ黄葉まつり、稲沢サンドフェスタ

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」による。

わが

改革による「市政の土台固め」と、未来を展望したまちづくり、財政集中改革と第4次呉市長期総合計画

呉市の特徴

呉市は、瀬戸内海のほぼ中央部、広島県の南西部に位置し、瀬戸内海に面する陸地部と、倉橋島や安芸灘諸島などの島しょ部で構成される気候温和で自然環境に恵まれた都市です。

近代呉市の発展は、明治19年に第二海軍区軍港に指定され、明治22年の呉鎮守府の開庁とともに本格的な海軍基地の建設が進められたことに端を発します。

昭和20年、終戦に伴い海軍の解体、人口の激減と、まちの存立基盤が失われ、混乱を極めた時期もありましたが、昭和25年、旧軍港市転換法の制定を機に、造船、鉄鋼などのものづくり産業を中心とした臨海工業都市に生まれ変わり、また、平成15～17年にかけての近隣8町

との合併により、新たに加わった特色ある地域資源を生かしたにぎわいづくりが進められています。

財政集中改革への取り組み

私は、持続的なまちの発展を図っていくためには、まずは健全な財政基盤を築くことが不可欠であると思っています。

しかし、三位一体改革の影響などにより、財政は厳しい状況に陥り、平成19年度時点での向こう5年間の財源不足額は384億円に上ると見込まれました。

財源不足額の解消に向け、平成20年度から24年度までの5年間で集中改革期間と位置付け、「人件費の大幅削減」「企業誘致の推進等による市有地の積極的処分」および「施策等の見直し」を柱とした「呉市財政集中改革プログラム」を策定し

ました。

併せて、地域力の再生による自主的で自立したまちづくりを行っていくため「ゆめづくり地域協働プログラム」を策定するとともに、地方分権改革のさらなる進展を見据え、自ら考え、行動する職員を育成していくため「呉市職員活性化プログラム」を策定しました。

これら3つのプログラムを強力に推し進めた結果、本年度末には、おおむね財政の健全性を回復する見通しとなりました。

交通局の経営改革

近年の交通局(公営バス事業)の経営を取り巻く環境は非常に厳しく、乗客数はピーク時の4分の1にまで低下しており、長年その経営は、一般会計からの支援で続けられてきましたが、もはや、多額

の財政支援は困難であり、抜本的な改革を行うこととしました。

そこで、市民の移動手段を持続的に確保していくため、民間的経営手法により経営の効率化および市民サービスの向上を図る一括完全民間移譲が最善の選択であると判断し、平成24年4月の移譲に向け、各種手続を進めています。

第4次呉市長期総合計画

こうした改革に一定のめどが立ち、本市の「未来づくり」に向けた施策を計画的に実施していく態勢を整えることができました。

これからのまちづくりにおいて重要な役割を果たすのは、わが国の長い歴史と風土に培われた、家族や親族、あるいは地域における強い連携、すなわち「絆」を大切に

こうした考えの下、地域の「つながり」や人々の心の「絆」を大切にしながら、本市の特色を最大限に生かし、心身共に活力あふれる社会を目

指したまちづくりを進めていくため、「絆」と「活力」を創造する都市・くれ」を将来都市像とする「第4次呉市長期総合計画」を策定しました。将来都市像の実現に向け、「人づくり」「地域づくり」「都市づくり」を3つの重点戦略として掲げるとともに、前期5年間で重点的に取り組む8つの施策を「重点プロジェクト」と位置付けました。

ここでは、重点プロジェクトのうち、主なものを2つ紹介します。

●市民の健康づくりの推進

本市は、人口15万人以上の都市で最も高齢化率が高い都市ですが、今後、高齢化がさらに進展することが



呉市健康の日ウォーキング大会

見込まれる中、市民主体のまちづくりを進めていくためには、市民の皆さんが、心身共に健康で元気な状態をしっかりと維持していくことが大切になります。

こうした中、市民の健康寿命の延伸に向け、ウォーキングを柱とした健康づくりなど、地域ぐるみでの運動習慣の定着を図っていきます。

また、市民の皆さんが普段の生活の中で日常的に健康づくりや介護予防に取り組むことができるよう、地域の身近な公園に「健康遊具」を設置するなど、健康づくりを支える運動環境の整備を進めていきます。

●地域の特色を生かした活力の創出

本市は、近隣町との合併により、美しい自然や歴史、文化、地域産業など特色ある地域資源を有することになりました。こうした特色を最大限に生かした取り組みを地域の活性化に結びつけていきたいと考え、地域のにぎわいの醸成に向け、新規農業・漁業就業者の育成支援や産地ブランド力の確立など、島しょ部地域の主要産業である農水産業の振興を図っております。

また、大和ミュージアムを軸とした周遊・滞在型観光の推進や、

本市に多くの伝説が残る平清盛が平成24年のNHK大河ドラマに決定したことを受け、観光資源をブラッシュアップしていくなど、特色ある地域資源を生かした観光振興を推進しております。

将来都市像の実現に向けて

未来を切り開き、活力あふれる呉市をつくるためには、「財政の健全化」「地域協働の推進」「職

員の活性化」といった市政運営の基盤を強化しながら、真に必要な施策に重点的に投資していくことが不可欠であり、責任世代であるわれわれの責務であります。

将来にわたり市民の皆さんが夢や希望を持ち、安心して安全・快適に暮らしていくことができるよう、市民協働を軸に市民の皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思っています。

プロフィール

- ◆ 面積 353・84 km²
- ◆ 人口 24万1908人
- ◆ 世帯数 11万971世帯

〔将来都市像〕「絆」と「活力」を創造する都市・くれ、協働による自主的で自立したまちを目指して、

〔市町村合併〕下蒲刈町(平成15年4月1日編入)、川尻町(平成16年4月1日編入)、音戸町・倉橋町・蒲刈町・安浦町・豊浜町・豊町(平成17年3月20日編入)



呉市長 小村和年



〔特産品〕みかん、レモン、トマト、ネギ、タチウオ、牡蠣、ちりめん、藻塩

〔観光〕大和ミュージアム、音戸の瀬戸(平清盛像、松濤園(朝鮮通信使資料館、御手洗地区(重要伝統的建造物群保存地区)

〔イベント〕呉みなと祭(4月)、呉市健康の日ウォーキング大会(10月)、くれ食の祭典(11月)、安芸灘とびしま海道オレンジライド(12月)、音戸の舟唄全国大会(1月)、呉とびしまマラソン(2月)

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。